

小説

棚の上の日本人形

高橋 実

安中敏江の部屋にガラスケースに入った日本人形が飾られている。その人形は体が反り返って天井の方を向いている。それは、七十六歳の敏江の生涯よりもずっと長くこの家に残されている。敏江は母の顔を知らない。敏江が生まれて間もなく亡くなったと聞いている。母はこの人形にどんな思いを込めていたのか、それをどのように今日まで伝え残したのか、敏江は五歳の時、この長井新作・ナカの養女になった。

敏江が平成二十四年、七十二歳になったある日、敏江のもとに一通の手紙が届けられた。差出人は警視庁刑務部給与課と書いてあった。何か犯罪にかかわったのであろうか。開いてみるとそれは敏江の実母フジの死による遺産相続の知らせだった。

安中 敏江様

実母フジ様ご逝去に伴う連絡について

平成二十四年九月十日

拝啓 失礼ながら突然の書中にてお知らせさせていただきます。

さて、このたび手紙を出させていただきましたのは、敏江様の実母フジ様が平成二十三年十一月十四日にお亡くなりになったことで敏江様に連絡したいことがあるためです。

フジ様には他にご子息がいらっしゃり、そのうちのおひとりが警視庁の職務に協力していただいたことによりお亡くなりになったことから、「警視庁の警察官の職務に協力援助した者の災害給付に関する条例」に基づき、フジ様に対して警視庁から遺族給付年金を支給しておりました。

今回フジ様がお亡くなりになったことで、遺族給付年金の未支給分を相続人にお支払するため、ご遺族から戸籍謄本等の書類を提出していただきましたところ、敏江様がフジの実子であることが分かりましたので、未支給分をお支払するものです。

つきましては、支払手続についての具体的な説明をさせていただきたいと思っておりますので、お手数ですが下記までご連絡いただきますようお願いいたします。

たします。

敬具

【お問合せ先】〒100-8929

東京都千代田区霞が関2-1-1

警視庁警務部給与課災害補償係

敏江にはフジの事は知らない。周りからはフジは死んだと聞かされていた。小さいときに別れた母の記憶は敏江にはない。いままで生きていたのか。どんな人生を送っていたのだろうか。フジの親族の一人が警察業務に協力して、遺族給付金を受けていたというのである。

いったいどんな協力をしたというのであろうか。それはともかく、この手紙は敏江を驚かせた。とっくに死んだとも思っていた実母のフジがまだ生きていたということだった。どんな最期だったか、その最期をみとった人は誰であったのであろう。

その年十二月には、今度は東京の法律事務所から突然「遺産分割の件」という手紙が来た。その内容は川崎市で年金生活をしている上田善吉・テル子老夫婦（ともに昭和三年生まれ）のうち、テル子がなくなり、善吉・テル子夫妻には子がなく、その遺産分割の被相続人の一人に敏江はなっているという趣旨だった。善吉・テル子の名前は初めて聞く名前だった。この同封されていた相続人は二十八人もいるというのである。そして同封されていた相続関係説明系図には驚いた。そこには今まで敏江が聞いたこともない係累の名前がずらりと並んでいた。フジが再婚した後に生まれた異母兄弟だった。さらにフジの兄弟、フジの母親五人の子、父親はのちの別の人と結婚して、その長女が上田テル子だった。上田テル子の母親はまた別の人と結婚し、フジには異父兄弟が五人もいるという。この複雑な蜘蛛の巣のような相続人関係図を見て眼が眩むほどに驚いた。いったい実母フジは晩年どんな人生を送ってきたのか。ただ一人の娘の敏江の事は気にならなかったのであろうか。

敏江が生まれたのは、東京の原宿だった。家は、明治神宮のすぐ前にあった。以来、埼玉の川越、そして新潟の八石山麓の北条追田、北条駅前四日町に、そして今の長岡と転々と住居を変えてきた。その元をさかのぼってみるとあの戦争に突き当たる。敏江の人生は戦争によって翻弄されてきた。実父康次は召集され、敏江は、川越の康次の叔母ナカと長井新作の養女となった。ちょうど二人に子供がなかったためである。長井家は北条では旧家で土地も広く、ずらりとたくさん墓が残っていた。新作夫婦は毎晩のように酒を飲んで、酒が入ると、新作は昔の話をくりかえし、ナカに口説いたが、ナカは決して口答えした

ことはない。考えてみれば無理もない。新作はナカの親族の面倒を見てきた。敏江もその新作の口説きの一つだった。ナカから実母のフジの事を聞かされたことはない。フジは康次と離婚した後、東京の原宿を引き払って、その後の行方はプツリ切れたままになっていた。敏江も実母のことは聞かされていなかった。北条で新作夫婦としばらく同居していたようだ。敏江は養母ナカのことをばあちゃんと呼んでいた。

ナカがすっかり年取ったあるときぽつりと言った言葉があった。

「敏江お前に謝らなければならないことがあるのだった」

その時は、敏江はそのわけを聞き返さなかったが、ひょっとするとそれは実母フジについての事だったのではないかと想像してみた。フジのその後については、養母ナカから一度も聞いたことがなかった。聞きたいとは思いつつ養母ナカに奇妙な後ろめたいところがあった。[私がこんなに親切にしているのに、まだ母のことが忘れられないのか]と言われるのではないかと思ったからである。康次は後にフジと離婚して別の人と再婚した。その再婚相手が新潟県の糸魚川の人だった。その再婚相手のツユとの間に敏江の妹にあたる四人の子がいて、付き合いは今も続いている。敏江の両親は離婚した後、それぞれ別の人と結婚して父母兄弟、異父兄弟がいたのだった。

戦争の記憶といえ、子どもの頃、防空壕に入った記憶があるが、東京が空襲を受けたのは、敏江が川越に疎開してからである。

成人になったある日、懐かしい原宿を訪ねてみた。表参道の坂道の途中の小路にあった家の辺りはファッションビルが乱立し、幼い頃の思い出は跡形もなく消えて、あのころの記憶は遠い過去の追いやられてしまった。青山の幼稚園に行っていたころの写真がセピア色になって敏江のアルバムに張られている。それでも空襲警報のサイレンの音も記憶にある。敏江の養父は柏崎在の北条の旧家だった。敏江が北条に移ってから長岡の空襲があった。東の空が赤くなっている記憶が敏江には今もまざまざと目に焼き付いている。

昭和二十年四月、敏江は地元の北条小学校に入学した。そして昭和三十九年三月北条中学校を卒業した。その時、親の苗字と変わっていると、仲間にいじめられる心配して親の苗字を名乗った。その養父の手紙が今でも仏壇の引き出しに遺っている。この手紙は、かつて、川越の家に行ったときに、そこには、ナカの兄夫婦が住んでいたが、その叔母が押し入れの中からこんな手紙が出てきたといいながら、敏江に渡してくれた手紙だった。

拝啓

永らくご無沙汰致し失礼申上げました。其の後皆々様御変りなく御過ごしの御事お喜び申し上げます。下って私方にて相変わらずにて、日々暮らしおりま

すれば、他事ながら御休心賜り度存じます。日夜心に思っ居ながらも、ついつい日々の仕事に追われ、心ならずも御便り致さず、誠に申訳ない事と思っ居ます。何卒悪しからず御寛容を賜りますやうお願い申し上げます。

つきましては、敏江儀此の度新制中学を卒業致しました。学業も成績よく、優等に卒業致しまして、本人のたつての希望にて、上の学校に進みたいと申し聞き入れませぬので、私としても続けられるやらどうかと思いましたが、高校試験にも合格いたしましたので、本人の希望通り進ませてやりたいと思います。つきましては、ご多用中誠に申訳ないですが、敏江の戸籍謄本が入用になりましたので、すみませんが、川越市役所より一通作成御送り下さいますようお願い申し上げます。

同封の金子にて足りるとおもいますが、もし不足のようでしたら、すみませんが、御建て替え下さるようお願い申し上げます。

できれば四月五日ころまで入手いたしたく思っ居ます。進学校は柏崎市県立柏崎商業高等学校です。

まずはご多用中恐れ入りますがお願い申し上げます。

皆さまご健康にて御過ごしの事御祈り申し上げます。

昭和五十九年三月三十一日

長井 新作

山口清美様

敬具

これは養父新作の敏江への心遣いであつた。清美は女のような名前であるが、ナカの姉の夫の事である。

七十六歳になつた敏江はいまこの地の民話語りのグループの事務局長を務めている。会員が四十五名、月二回の例会にはお互いの語りの情報交換がある。この会が始まつて十二年目、あちこちから語りの要請が舞い込んでくる。それもほとんどが報酬なしのボランティアである。しかし、敏江には聞いている人の生き生きした目が好きである。ほとんどがお年寄りで面白い話には笑い転げ、終わった後拍手してくれる。皆懐かしいのである。そこには年取つても生きる知恵が詰まっている。語る人も聞く人もそれが生きがいなのである。

語りの依頼は近隣の福祉施設から月に十五回、二十回と来る。それらを会員に割り振る仕事がある。そして最大のイベントは「百物語」である。市の中心部の会場を借り切つて、二日間で百話の昔話を語りきるのである。

幼い時は養母ナカから聞いた昔話は「巡礼おつる」の物語である。それは「か

か様の名前はお弓ともうします」というセリフとともにいまでも敏江の心に残っている。姿を消した両親を尋ねて巡礼姿で旅に出た九歳のおつるは、旅先で偶然母のお弓と出会う。しかし、両親は山賊稼業に身をやつし、自ら母と名乗ることができない。その話こそ養母ナカが敏江に語った唯一の昔話である。その話が忘れられず、敏江は語りのグループに入ることになったのだ。

敏江はあるとき、この「巡礼おつる」を三味線とともに瞽女唄として聞いたことがある。盲目の女旅芸人瞽女の三味線の切ない響きとともにその唄は敏江の心に沁み込んできた。そして今は行方の分からない実母フジの姿が彷彿される。

さればによりてはこれにまた いずれに愚かはなけれども 何新作のなきままに 古き文句に候えど 阿波の徳島十郎兵衛 その一人娘におつるとて 年はようよう九つで 背なにおいづる手にひしゃく 巡礼に報謝と言うて回る 回りきたのがどこなるや 摂津の国は大坂で 玉造村にてさしかかる またも報謝と立ち寄れば おゆみ我が子と知らずして どれどれ報謝進上と 思わずそばへかけ寄りて 顔つくづくと 打ちながめ さてしおらしい巡礼の子と 背なのおいづる見てあれば 同行二人とあるからは 定めし連衆は親ごたち それ聞くよりも巡礼は 申し上げますおばさんよ 親子の連れならよけれども わたしが三つのその年に ふた親様と申するは わたしを叔母さんにあつらえて どののいづくへ行きしやら 風の便りもなきゆえに それでわたしは一人旅 親を尋ねに回ります おゆみはそれを聞くよりも 親を尋ねに回るとは かわいいことではないかいと 口には言えど 心では思い回せば回すほど さてわれわれももの通り国を駈け落ち致すとき 三つになりての娘をば 母上様にあつらえて 国を駈け落ち致したが 指折り数えてみてあれば ちょうど今年で九つじゃ 見ればこの子と申するは十にも足りない娘じゃが もしや我が子でないかいと 国名を聞いてみるものを これのいかに巡礼よ 国はいづくであるぞえの それ聞くよりも巡礼は 申し上げますおばさんよ 国は阿波の国徳島の家中でございます おゆみはこれを 聞くよりも 阿波の国とは聞くからは さて珍しやなつかしい わしが生まれも阿波の国 我が子のおつるでないかいと言わんとせしが待てしばし 徳島と言うても広い家 人間違ひではならんそと 母親の名を聞いて見んものと これのいかに巡礼や ふた親の名は何と申すそえ それ聞くよりも巡礼は 申し上げますおばさんへ ととさんの名は阿波の徳島十郎兵衛と申します かか様おゆみと申します 我が名はおつると言います おゆみはそれを聞くよりも これが我が子のおつるかと思わずわあっと泣きいだす ここで親子と名乗ろうか いやまてしばし我が心 親子名乗りは致されぬ 我が夫の十郎兵衛は 刀の詮議のそのために 山賊

渡世で世を送る けさも悪人の豚六が わずかの金子に目をくれて大坂町の奉行所へ訴人するとのことなれば 今でも捕り手がきたならば 縄目に及ぶわれわれじゃ なんて親子と名乗らりょう 名乗れば同罪の罪じゃもの 名乗ってうき目を見せんより いっそ名乗らず帰そうと いやまてしばし我が心 ここで親子と名乗らずば どのいづくへ回りても。親という人ほかにない なんとしようぞえどうしようと しばし涙にくれにける 涙の顔をはらわれて これのいかに巡礼やはや昼飯のころなるに 昼飯食べて行きゃえよと いわれておつるは遠慮なく しからばお世話になりましょう 草鞆甲掛けの紐をとき 足をすすいで上らるる 昼飯すぐしたそののちは 旅の疲れでおつるこそ 現在母と露知らず おゆみのひざを枕にし ついすやすやと眠りける

瞽女唄の「巡礼おつる」はこのあと、父親十郎兵衛に会うが、おつるの懐の金を目当てに実の娘とは知らず、手をかけてしまう。そのつるの懐にあった書付を見て、十郎兵衛は実の娘と知る。息絶えた娘を連れて帰宅するとお弓も驚き、二人は死んだおつるを背負ってゆく途中、死んだのは観音様が身代わりだったと雲の上からお弓の娘のおつるが下りてくる話で終わっている。

敏江の家の棚に飾られている日本人形は敏江が原宿に住んでいた時からの人形である。実母フジはこの人形にどんな思いを込めていたのか。この人形とあのナカの語る「巡礼おつる」の姿と重ねあわされて、幼くして手放さなければならなかったわが子敏江のことを思っていたのではないか。

施設からは入所者に語りを聞かせてほしいと月に何回も依頼がやってくる。七十六歳の敏江の語りを、じっと聞いている。フジもまたこんな施設で晩年を過ごしたのだろうか。養父母の新作もナカもそでにこの世を去った。そのお年寄りの顔にいつかフジやナカの姿を見たように敏江は今日もまた語り続ける。

敏江の語る十八番の昔話に「人の一生」がある。ある時、神様があらゆる動物の寿命を決める話である。馬が神様の前に出てきて寿命三十年やるというのに、馬は人のために重い荷物を引かされ、尻を叩かれて走らされる競馬の三十年も生きるのはごめんだというので、馬の寿命は十年になったという。次に出てきたのは犬だった。犬も又一晩中眠らず、番をさせられ、山に入って獣を追う一生なんかいやだ、三十年はいらない。十年でたくさんだという、三番目に出てきたのは猿もまた十年の寿命で沢山だと二十年を放棄する。四番目に出てきたのは、人間だった。神様が与えた三十年ではまだ嫁を貰うかもらわないかという一番いい時期、その歳に死ぬのは嫌だ。もっとほしいという、神様はそれでは馬がいらないといった二十年をたして五十年ではどうかという。五十歳は働き盛り、一番面白い時期に死ぬのは嫌だ、もっと欲しいと欲張る。それでは犬

がいらないといった二十年をやるがどうか、七十年ですか、ちょうど孫がかわいい時期に死ぬのですか、もっとほしいという。最後に猿の残した二十年を貰い、人の寿命は九十年になった。でも三十歳から五十歳は馬からもらったお情けの人生、いくら働いても金にはならず、苦勞するばかり、そして五十歳から七十歳は犬からもらったお情けの人生、孫の残したものを食べさせられ、若手が遊びに出かけるときは留守番をさせられる。それから七十歳から九十歳は猿からもらったおまけの人生、人の悪口が耳に入る、子どもの悪いところも気になる、それでも見ざる聞かざる言わざる、言いたいこともじっと我慢で二十年を過ごさねばならない。人間の欲張りを揶揄した話である。

それでもと敏江は思う。なんとしても生き伸びねばならぬ。二人の母からいただいた命、石に噛り付いても生きねばならぬ。それこそが二人の母への恩返しではあるまいか。そう自問しつつ敏江はカラスケースのあの日本人形に語り掛ける。

平成二十八年秋腰の痛みを感じて敏江は病院を受診した。単なる腰痛と思っていたのに、医師から思いがけない言葉が飛び出てきた。膵臓が腫れているというのである。

「あなたの病気は膵臓癌でもはや手遅れ各所の臓器に転移しているのです」

その医師の宣告は雷のように敏江の脳天に突き刺さった。この正月を越せないかもしれない。残された夫は、子どもや孫は、次々といろんなことが浮かんできてその夜は眠れなかった。医師の言葉を伝えると、敏江のことばを夫は黙って聞いていた。入院する前に、今までやってきた語りの会の事務局の書類を次の人に引き継いだ。

その年十一月初め敏江は入院した。積極的な治療はできず、痛みを和らげることや、たまってきた腹水を取るための点滴が主な治療だった。病院のベッドの上で、寝ているうちに敏江の気持ちは次第に落ち着いてきた。昔話の「人の一生」の猿からおまけにもらった命ではないか。考えてみればやるべきことはやってきたのではないか。いまさらじたばたしたところで、どうすることもできない。巡礼おつるの最期のように敏江の命は棚の上の日本人形に伝えられて行くに違いない。病床のベッドの上で、敏恵には、家の棚に残した日本人形の目がきらりと光るのを感じた。

(終)